様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１９１２６

研究課題名（和文）家族の多重暴力に関する実態解明と多重暴力の予防・終結に向けた家族支援モデルの開発

研究課題名（英文）Identifying the prevalence and related factors for family poly-victimization and development of a family support model for preventing and terminating family poly-victimization

研究代表者
キタ　幸子（Kita, Sachiko）

東京大学・大学院医学系研究科（医学部）・講師

研究者番号：７０７５７０４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではパートナーからの暴力、子ども虐待、高齢者虐待の連鎖性・多重性といった家族の多重暴力の実態を明らかにし、多重暴力の終結・予防に向けた効果的な家族支援モデルの確立に向けて、家族の多重暴力を簡易的に測る日本語版Family Poly-victimization Scaleを開発した。その後、18歳以下の子どもを有する親に住民基本台帳を用いた横断観察研究を行い、尺度の妥当性を検証、家族の多重暴力の実態と関連要因を明らかにした。その結果を基に、IPV、子ども虐待、高齢者虐待の専門家にヒアリングを行い、各暴力の専門家の連携を基盤とした家族のストレングスに着目した新たな家族支援モデルを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では日本初のIPV、子ども虐待、高齢者虐待を含む家族の多重暴力を簡易的に測る尺度を開発し、複雑な家族の多重暴力の実態とその関連要因を明らかにした。本研究の知見は、複雑な現象である家族の多重暴力の正確な理解と更なる研究・支援の活性化に向けた貢献できると考える。更に本研究では、IPV、子ども虐待、高齢者虐待の専門家と支援者のヒアリングを重ね、各暴力の専門家の連携を基盤とした暴力の当事者、家族全体、家族のサブシステムのストレングスに着目した新たな家族支援モデルを提案した。このことは、将来、日本の家族の多重暴力の終結・予防、家族員と家族全体の健康改善に向けた大きな一助になると考える。

研究成果の概要（英文）： In order to clarify the actual situation of family poly-victimization that means the co-occurrence and intergenerational transmission of intimate partner violence (IPV), child abuse and elder abuse, and develop an effective family support model to prevent and terminate family poly-victimization, we developed the Japanese version of the Family Poly-victimization Scale (FPS-J) to simply measure family poly-victimization as a first step. After that, we conducted a cross-sectional study using the Basic Resident Registers for parents with children under 18 years old to test the validity of the FPS-J and identify the actual situation of family poly-victimization and its related factors. Based on those results and interviews with professionals in IPV, child abuse, and elder abuse, we proposed a new family support model focusing on family strength based on collaboration among providers in each type of violence.

研究分野：家族の暴力

キーワード：家族の多重暴力　パートナーからの暴力　子ども虐待　高齢者虐待

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

パートナーからの暴力（Intimate Partner Violence：IPV）、子ども虐待、高齢者虐待といった家族の暴力は、個人・家族の健康に著しい影響を与える健康問題である。IPV や子ども虐待などの暴力被害者は、うつ病や強い不安、心的外傷後ストレス障害（PTSD）、低い自尊感情、家族関係の不和など様々な健康問題・家族機能の障害を呈する（Kita et al., 2017; Kita et al., 2016; Faisal-Cury et al., 2013）。

IPV、子ども虐待、高齢者虐待はしばしば連鎖し重複することが示唆されている。この現象は「家族の多重暴力（Family Poly-victimization）」と呼ばれ、Edward Chan Ko Ling 氏が 2012 年に初めて提唱後、国際的な関心が高まっている（Ko Ling, 2012）。しかし家族の多重暴力に関する研究のほとんどは、IPV と子ども虐待（Kita et al., 2019; Ko Ling, 2014）、IPV と高齢者虐待（Mossige et al., 2017; Ko Ling, 2019）といった 2 形態の暴力の検証に留まっており、IPV、子ども虐待、高齢者虐待の 3 形態を取り扱った研究は未だない。

3 形態の多重暴力に関する研究が困難な理由として、既存尺度の限界がある。IPV、子ども虐待、高齢者虐待を測る尺度は既に存在するが、どれも項目数が多い上に算出方法や回答方法などが異なるため、併用することが難しい。そのため、より簡易に家族全体の多重暴力を包括的に測る新たな日本語尺度の開発は喫緊の課題である。

近年、Ko Ling 氏は 0 歳から 18 歳以下の子どもを有する成人を対象に家族全体の多重暴力を把握する「Family Poly-victimization Scale（FPS）」を開発し、2018 年中国での調査で妥当性・信頼性の検証を行った(Ko ling, 2019：投稿中)。FPS は全 12 項目の簡易な尺度で、各暴力の被害者・加害者を特定できる構造となっている。このことから、包括的な家族の多重暴力に関する日本初の実態解明に向け、FPS 日本語版開発は急務である。

従来の研究や支援現場では、IPV、子ども虐待、高齢者虐待は独立した問題として認識されてきた。単一の暴力へのアプローチでは、暴力に苦しむ家族の現状とニーズを包括的に理解・支援することは難しく、子どもなどの家族員の命を落とすケースもある。そのため、各暴力の専門家の連携を基盤とした新たな家族支援モデルの創生が望まれる。多重暴力の終結・予防、家族員・家族全体の健康改善に向けた効果的で家族支援モデルの開発に向けて、未だ明らかになっていない 3 形態の多重暴力の関連要因を解明することは必須である。

また他国の研究者と協働し、各国の多重暴力の実態と関連要因を比較、相違点・共通点を検討することで、日本独自の文化や制度に配慮したより実用的な家族支援モデルの開発につながると同時に、国際的に汎用性の高い支援方法も提案できると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、下記の 3 点である。

目的１　日本語版 Family Poly-victimization Scale の開発、妥当性・信頼性を明らかにする。
目的２　日本における家族の多重暴力の実態及び関連要因を明らかにする。
目的３　多重暴力に苦しむ家族への効果的で実用的な家族支援モデルを開発する。

３．研究の方法

【研究 1】日本語版「Family Poly-victimization Scale」の開発と妥当性・信頼性の検証

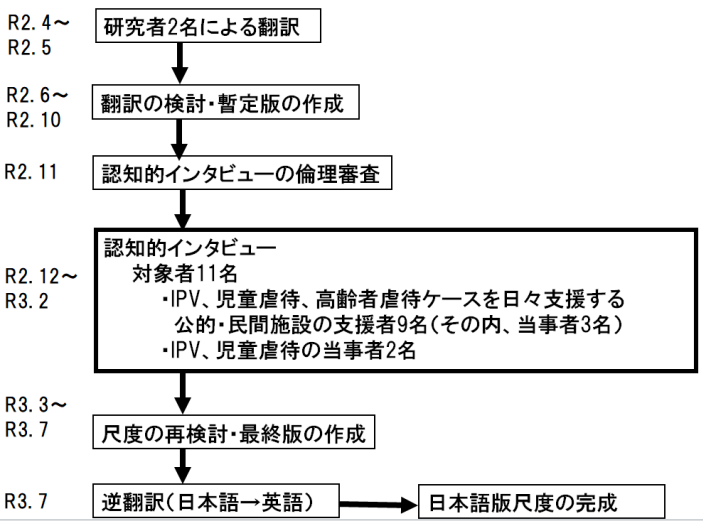
（日本語版の開発）

(1) 2020 年 4 月に FPS の開発者から日本語版開発の許可を得て、4 月～5 月に英語に堪能な研究者 2 名が英語から日本語に順翻訳を行った。

(2) 2020 年 6 月～10 月にかけて、IPV、子ども虐待、高齢者虐待の国内外の研究者 7 名で構成された研究チームで、FPS の日本語訳の検討を行い、日本語版 FPS の暫定版を作成した。

(3) 2020 年 12 月～2021 年 12 月に日本語版 FPS の内容妥当性と表面妥当性の検討のために、IPV、子ども虐待、高齢者虐待を日々支援する公的・民間施設の支援者と当事者 11 名に認知的インタビューを実施した。本研究は東京大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

図1: 日本語版FPSの開発の流れ



(4) 2021 年 3 月～7 月に認知的インタビューの結果を基に、日本語版尺度の内容妥当性と表面妥当性を研究チームで協議・修正の上、最終的な日本語版 FPS を完成させた。その後、尺度を日本語から英語に逆翻訳を行い、開発者に確認・承認を得た。

(5) 日本に高齢者虐待を測る尺度が存在していなかったため、日本語版 FPS の妥当性検証のために、上記の(1)～(4)と同様の時期・流れで、日本語版 Modified Conflict Tactics Scale (MCTS も開発した。

（尺度の妥当性・信頼性の検証）
(1) 研究デザイン：住民基本台帳を用いた横断観察調査
(2) 研究期間：2022 年 1 月～2022 年 2 月
(3) 対象者：A 市（東京都近郊）在住で 0 歳～18 歳以下の子どもを有する親
(4) 実施方法：A 市の住民基本台帳から対象者をランダムに抽出の上、調査ウェブシステムの URL 及び QR コードが記載された研究案内チラシを送付した。対象者は調査ウェブシステム上で詳細な研究説明を読み、同意の上、自記式質問紙に回答した。
(5) 調査項目：
① 属性：年齢、国籍、婚姻状況、世帯年収、最終学歴、子どもの数・年齢、家族構成など
② 家族の多重暴力：日本語版 FPS
③ IPV：日本語版 Conflict Tactics Scale Short Form（CTS2F：Umeda et al., 2014）
④ 子ども虐待：日本語版 Conflict Tactics Scale-Parent Child（CTS-PC：Baba et al., 2017）
⑤ 高齢者虐待：日本語版 Modified Conflict Tactics Scale（MCTS：Beach et al., 2005）
⑥ 外傷後ストレス障害（PTSD）：日本語版 PCL-5（伊藤ら, 2015）
⑦ 抑うつ・不安：K6 日本語版（Furukawa, 2009）
⑧ 子どもの QOL：日本語版 KIDSCREEN-10（Nezu et al., 2016）
(6) 解析方法：日本語版 JCTS2F、日本語版 CTS-PC、日本語版 MCTS を至適基準として、日本語版 FPS の被害あり・なしの 2 群で Welch の t 検定を用いて得点を比較した。また日本語版 FPS の被害あり・なしの 2 群で日本語版 PCL5、K6 日本語版、日本語版 KIDSCREEN-10 の得点を Welch の t 検定を用いて比較した。
(7) 倫理的配慮：本研究は国立成育医療研究センター倫理審査委員会の承認を得て実施した。本研究は IPV、子ども虐待、高齢者虐待の項目が含まれており、各法律に従い、必要時は、A 市の子ども家庭支援センター及び地域包括支援センターに情報共有、支援の相談・依頼を行った。

【研究 2】家族の多重暴力の実態及び関連要因の検証
上記の横断観察調査のデータを用いて、家族の多重暴力の実態と関連要因を検証した。
（家族の暴力の実態）
日本語 FPS の IPV、子ども虐待、高齢者虐待の項目、日本語版 JCTS2F、日本語版 CTS-PC、日本語版 MCTS の記述統計量（n, %; 平均値, SD）を算出した。
（家族の多重暴力の関連要因）
(1) 子ども虐待の世代間連鎖とその要因及び子どもへの影響を明らかにするために、幼少期被虐待体験（日本語版 FPS）、精神的苦痛（PTSD：日本語版 PCL-5、抑うつ・不安：K6 日本語版）、現在の子ども虐待の加害（日本語版 FPS）、子どもの QOL（日本語版 KIDSCREEN-10）を用いて、仮説に基づき、共分散構造分析を実施した。
(2) 幼少期虐待、現在の IPV、子ども虐待の暴力の連鎖・多重性とその要因が性別で異なるかを検証するために、幼少期虐待体験（日本語版 FPS の身体的虐待、心理的虐待）、精神的苦痛（PTSD：日本語版 PCL-5、抑うつ・不安：K6 日本語版）、現在の IPV 被害、IPV 加害、子ども虐待の加害（日本語版 FPS）を用いた性別（男女）の多母集団同時解析を実施した。

【研究 3】多重暴力に苦しむ家族への効果的で実用的な家族支援モデルを開発
【研究 2】の結果を基に、IPV、子ども虐待、高齢者虐待の専門家からのヒアリングを行い、家族の多重暴力の終結・予防に向けた家族支援モデルを提案した。また Ko Ling 氏と中国・香港での研究の知見及び日中の支援システムの相違点を基に協議し、家族支援モデルの文化的な配慮について検討した。

４．研究成果
【研究 1】日本語版「Family Poly-victimization Scale」の開発と妥当性・信頼性の検証
（日本語版の開発）
(1) 認知的インタビュー
IPV、子ども虐待、高齢者虐待に関する支援を行う子ども家庭支援センター、女性相談所、民間シェルター、地域包括支援センターなどの支援者 9 名（その内、当事者 3 名）と IPV、子ども虐待の当事者 2 名に認知的インタビューを行った。
(2) 日本語版 FPS の工夫・修正点
日本の現状と尺度の文化的適応の観点から、主に下記の箇所を検討・変更した。
①IPV に経済的坊領の項目を追加
②日本の実情に合った例を追加
全ての身体的暴力に「冷水を浴びせられる」、子どもの心理的虐待に「面前 DV」「教育虐待」、高齢者の身体的虐待に「身体の自由の制限」を追加　など
③難しい言葉は使わない、漢字にふりがなをつける
④回答に「答えたくありません/わかりません」を追加
⑤6 か月以内の暴力被害の頻度も測るための 4 件法の回答を追加

（尺度の妥当性・信頼性の検証）
(1) 対象者の流れ:A 市在住の 0 歳～18 歳以下の子どもを有する親 2133 名に案内チラシを送付し、483 名の有効回答が得られた（回答率：22.6%）。
(2) 属性：対象者の年齢は平均 42 歳であり、約半数（52%）が女性であった。大半は婚姻しており（93%）、世帯年収は 500 万以上（83%）、就労（79%）していた。10 割が精神疾患の既往歴があり、同居人数の平均は 4 人であった。子どもの人数の平均は 1.9 人であった。
(3) 尺度の妥当性
日本語版 FPS で IPV ありと回答した者は、日本語版 CTS2F の全ての下位尺度（心理的攻撃、身体的暴力、けが、性的強要）の得点が有意に高かった（$p < .001$）。日本語版 FPS で子ども虐待ありと回答した者は、日本語版 CTS-PC の心理的攻撃、身体的虐待（けが）、身体的虐待（軽度）、身体的虐待（中度）、身体的虐待（重度）の下位尺度の特定が有意に高かった（$p < .001$）。日本語版 FPS で高齢者虐待ありと回答した者としなかった者で、日本語版 MCTS の下位尺度の得点と有意な差はなかった（$p = .001$）。

【研究 2】家族の多重暴力の実態及び関連要因の検証

（家族の暴力の実態）
日本語版 FPS で過去に精神的暴力、身体的暴力、性的暴力、経済的暴力をされた回答した者は、234 名（48%）、117 名（24%）、41 名（9%）、46（10%）であった。その中で現在、パートナーから精神的暴力、身体的暴力、性的暴力、経済的暴力を受けていると回答した者は、114 名（24%）、5 名（1%）、9 名（2%）、8 名（2%）であった。また対象者の子ども（平均 10 歳）が精神的虐待、身体的虐待、性的虐待、ネグレクトを受けたと回答した者は、169 名（35%）、70 名（15%）、5 名（1%）、2 名（0.5%）であり、加害者が自分と答えた者は、108 名（22%：精神的虐待）、28 名（6%：身体的虐待）であった（性的虐待、ネグレクトは 0 名であった）。高齢者虐待については、対象者の親（73%：実母、30%：75 歳以上）が精神的暴力、身体的暴力、性的暴力、ネグレクト、経済的暴力をされた回答した者は、111 名（24%）、38 名（8%）、1 名（0.1%）、4 名（0.4%）、28 名（5.7%）であった。加害者が自分と答えた者は、11 名（2%：精神的虐待）、2 名（0.6%：身体的虐待）であった（性的虐待、ネグレクト、経済的虐待は 0 名であった）。
（家族の多重暴力の関連要因）
(1) 全データ（n = 483）を用いて解析した結果、を幼少期の身体的虐待が現在の子ども虐待加害に関連していた。また精神的苦痛が現在の子ども虐待加害と子どもの QOL に関連していた。幼少期の身体的虐待と子どもの QOL との関連に現在の子ども加害が媒介していた（間接効果：$p > .05$）。
(2) 暴力の連鎖・多重性とその要因を男女で比較した結果、男性（n = 231）は幼少期の身体的虐待が現在の IPV 加害に関連していた。また現在の精神的苦痛が現在の IPV 被害、IPV 加害、子ども虐待加害に関連していた。幼少期の被虐待体験（身体的・精神的虐待）と現在の暴力経験との関連に精神的苦痛は媒介していなかった（間接効果：$p = .03$）。一方で女性（n = 252）は、幼少期の精神的虐待と身体的虐待が現在の子ども虐待加害と関連していた。幼少期の身体的虐待と現在の暴力体験との関係に精神的苦痛が媒介していた（間接効果：$p = .02$）。

【研究 3】多重暴力に苦しむ家族への効果的で実用的な家族支援モデルを開発

【研究 2】の結果を基に、東京都内・近郊の子ども家庭支援センター、児童相談所、女性相談所、民間シェルター、地域包括支援センターなどの専門家からのヒアリングを行い、暴力のある家族を日本語版 FPS を用いて包括的にアセスメントし、家族の暴力の連鎖と多重性のリスクを各部署の専門家が共有・把握し、暴力の当事者、家族全体、家族のサブシステム（親子、夫婦など）のストレングスに着目した新たな家族支援モデルを提案した。その後、その家族支援モデルの現場での応用可能性、実現可能性を検証すべく、更なるヒアリングを実施した。また Ko Ling 教授の中国・香港での研究知見や支援システムのヒアリングを通じて、日本の家族の構造に着目した文化を配慮した家族支援モデルの改善も試みた。現在、自治体や民間支援団体などに新たな家族支援モデルの応用に向けた普及を行っている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　7件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Kita Sachiko、Baba Kaori、Iwasaki-Motegi Riho、Kishi Emiko、Kamibeppu Kiyoko、Malmedal Wenche Karin、Chan Ko Ling	４．巻 20
２．論文標題 Development of A Japanese Version of the Family Poly-Victimization Screen (FPS-J)	５．発行年 2023年
３．雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	６．最初と最後の頁 3142～3142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph20043142	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 キタ幸子	４．巻 64(2)
２．論文標題 パートナーからの暴力（IPV）被害による心身の影響―被害者の語りから必要な支援を見極める―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 保健の科学	６．最初と最後の頁 86～89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kita Sachiko、Tobe Hiromi、Umeshita Kaori、Hayashi Mayu、Kamibeppu Kiyoko	４．巻 18
２．論文標題 Impact of intimate partner violence and childhood maltreatment on maternal infant maltreatment: A longitudinal study	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japan Journal of Nursing Science	６．最初と最後の頁 e12373
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jjns.12373	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Kita Sachiko、Hayashi Mayu、Umeshita Kaori、Tobe Hiromi、Uehara Nana、Matsunaga Momoe、Kamibeppu Kiyoko	４．巻 10
２．論文標題 Intimate partner violence and maternal child abuse: The mediating effects of mothers' postnatal depression, mother-to-infant bonding failure, and hostile attributions to children's behaviors.	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Psychology of Violence	６．最初と最後の頁 279～289
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1037/vio0000245	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kita Sachiko、Ochiai Kayoko、Sato Yoichi、Akiyama Saburo、Abe Mitsushiro、Tashita Keiichi、Tanaka Hiroko、Matsumoto Fumiko、Hayashi Shihoko、Kohashi Kosuke、Tsujino Keiichiro、Uchiyama Kentaro、Tsukamatsu Konomi、Ikeda Utako、Ikeda Mari、Suzuki Hidehiro	4．巻 20
2．論文標題 Development of the Training Program on Child Abuse Prevention for Citizens (TCAP-C) and Its Effects and Acceptability: Community-Based Participatory Research	5．発行年 2023年
3．雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6．最初と最後の頁 1414～1414
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph20021414	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Kita Sachiko、Kamibeppu Kiyoko、Saint Arnault Denise	4．巻 19
2．論文標題 “Knitting Together the Lines Broken Apart”: Recovery Process to Integration among Japanese Survivors of Intimate Partner Violence	5．発行年 2022年
3．雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6．最初と最後の頁 12504～12504
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/ijerph191912504	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 Kita Sachiko、Zonp Zeynep、Saint Arnault Denise	4．巻 79
2．論文標題 Initial testing of components of the cultural determinants of trauma recovery theory amongst American Gender‐Based Violence survivors: Structural equation modelling	5．発行年 2022年
3．雑誌名 Journal of Advanced Nursing	6．最初と最後の頁 1476～1492
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/jan.15331	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Kita Sachiko、Sato Iori、Sakka Mariko、Soejima Takafumi、Kamibeppu Kiyoko	4．巻 16
2．論文標題 Does the Use of Childcare Services Reduce the Impact of Intimate Partner Violence on the Quality of Life of Children?: Multiple-Group Structural Equation Modeling	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Applied Research in Quality of Life	6．最初と最後の頁 1825～1845
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s11482-020-09847-w	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 キタ幸子	4．巻 39(1)
2．論文標題 コロナ・パンデミックとIPV―家族のなかで何が起こったか、支援現場での課題と新たな支援とは	5．発行年 2022年
3．雑誌名 家族療法研究	6．最初と最後の頁 25～28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 キタ幸子	4．巻 62(8)
2．論文標題 当事者団体との関係性を育むーIPV被害者の声を聞くー	5．発行年 2020年
3．雑誌名 保健の科学	6．最初と最後の頁 508～512
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 キタ幸子、Edward Chan Ko Ling、白川美也子、岸恵美子、上別府圭子	4．巻 37(2)
2．論文標題 大会企画シンポジウム4 複数の暴力が起きている家族の理解と支援－IPV、児童虐待、高齢者虐待のつながり	5．発行年 2020年
3．雑誌名 家族療法研究	6．最初と最後の頁 12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 キタ幸子	4．巻 25(2)
2．論文標題 家族内の暴力の多重性・連鎖性を研究する～1人の家族員から2つの事象を評価する～	5．発行年 2020年
3．雑誌名 家族看護学研究	6．最初と最後の頁 224～231
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　5件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 キタ幸子
2．発表標題 ジェンダーに基づく暴力のリカバリープロセスのタイプ分類と尺度開発：4か国共同研究
3．学会等名 第42回日本看護科学学会学術集会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 キタ幸子
2．発表標題 家族看護における混合研究法の可能性―ジェンダーに基づく暴力の リカバリープロセスに関する研究を一例に―
3．学会等名 第10回家族看護学研究セミナー（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 キタ幸子
2．発表標題 妊娠期のパートナーからの暴力（IPV）に関する研修
3．学会等名 第 31 回福岡母性衛生学会学学術集会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 キタ幸子
2．発表標題 妊娠中の母親と子どもへのDV―発見と対応の基礎知識―
3．学会等名 第37回日本助産学会学術集会（招待講演）
4．発表年 2023年

１．発表者名 キタ幸子
２．発表標題 Development of the Training for Child Abuse Prevention for Citizens (TCAP-C) in Japan
３．学会等名 he 26th East Asian Forum of Nursing Scholars（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	馬場　香里 (Baba Kaori) (00825127)	東京都医学総合研究所	
研究協力者	岩崎　りほ (Iwasaki-Motegi Riho) (40760286)	国立保健医療科学院	
研究協力者	岸　恵美子 (Kishi Emiko) (80310217)	東邦大学	
研究協力者	上別府　圭子 (Kamibeppu Kiyoko) (70337856)	国際医療福祉大学	
研究協力者	コーリン　チャン (Ko Ling Chan)	香港理工大学	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関